



未来構築

江口 雅之

2017年11月初旬、ペルーの首都リマにラテンアメリカ各国から多くの日系人が参集した。隔年で開催される汎米日系人大会2017(COPANI 2017)である。開催地のペルーの他、北中南米、カリブ国の他、日本や欧州の域外国からの参加も含め13カ国、総数約500名が参加する大会となった。大会のテーマは「未来構築」である。大会の会場は2017年で設立100周年を迎えたペルー日系人協会(APJ)が入る日秘文化会館である。日秘文化会館は、戦後賠償としてペルー政府が無償贈与した土地に建設され、1959年の落成式にはベラウンデ大統領と皇太子殿下が記念植樹をした、ペルー日系人社会の苦難と成功の歴史を背負った象徴的な場所である。

COPANI 2017の4日間にわたる大会期間中は、5つの講演と6つのワークショップが開催された。各々のワークショップでは、「日系人アイデンティティと移民」、「言語、習慣、伝統」、「アメリカでの日系教育」、「企業家精神、専門職活動、協力主義」、「ボランティアとソーシャルサービス」、「リーダーシップと価値観」と、現代日系人社会の問題意識が反映されたテーマについて討議された。ただ、私にとって印象的だっ

たのは、国会最大勢力の野党「人民の力党」の党首ケイコ・フジモリ氏の講演であった。かつてケイコ氏の父アルベルト・フジモリ元大統領が大統領選挙に立候補したとき、日系人社会の多くがフジモリ氏の出馬に反対したという。ペルーは1899年にラテンアメリカで初めて正式に日本からの移民を790人受け入れた国であり、2019年には日本人移住120周年を迎える。ただし、第二次世界大戦中にはペルー政府から日本は敵対国とみなされ、ペルーに在住する日系人は財産没収や収容などの憂き目に会った苦難の歴史があるため、在ペルー日系人は政治との関わりを避け、現在も政治とは一定の距離を保ち続けていると聞いていた。また、昨年2016年の大統領選挙では、ケイコ候補は接戦を

得票率0.25%の僅差で敗れたが、その主な支持基盤は貧困層の大衆であり、必ずしも日系人だからといってケイコ氏を支持したわけではないとも聞いていた。そうした中で、創立100周年と同時期に開催されたCOPANIに、現在も国内政治で影響力を持つケイコ氏が招待され、日秘文化会館の大ホールで汎米各国から集まった日系人を前にして講演し、続くパネルディスカッションでも日系の血を引く自身とペルー社会との関係を築きそうにかつ力強く語るケイコ氏の姿を見て、今大会はこれからのペルー日系人社会が未来に向かいさらに躍動する一つの転換期を象徴しているのではないかと思った。

大会3日目の夜には、毎年恒例の「祭り」が日系人の総合運動協



COPANIでのケイコ・フジモリ氏講演(写真はすべて筆者撮影)

会（AELU）で開かれた。AELUの「祭り」には日系人・非日系人も多く集まり、今年は2万人が参加した。県人会などの日系コミュニティが多数の屋台を出店し、各県人会や多数の日系の小中学校の入場行進、日本酒樽割り、神輿かつぎ、音楽ショー、盆踊り、打ち上げ花火と盛りだくさんの内容で、今年はCOPANI参加者も各国の国旗を持って入場行進に加わった。そして、日本で活動する日系ペルー人歌手のアルベルト城間、ルーシー長嶺、エリック山崎などが駆けつけて熱唱した他、ブラジル、パラグアイ、アルゼンチン、米国の日系人歌手も音楽ショーを彩った。来賓席で観覧していると、ペルー日系人協会の幹部が「今年は外国人が多いなあ」、「そうだね外国人が多い」と言っている。なるほど、ペルーの日系人にとって、日系人といってもラテンアメリカ地域の他国の日系人は「外国人」なのである。その時、自分自身も含めて日本では一般に「日系人」を一括りに捉えているのではないだろうかと思った。ブラジル日系人、メキシコ日系人、パラグアイ日系人、ボリビア日系人等、日本人を祖先として又は自

ら移住者として日系の血を引いても、各々が在住する国の文化・社会の中で暮らしてきた人々の思考・嗜好は必ずしも同じではないはずだ。その一方で、多様な文化・習慣を持つ各国の日系人は、同時に日系のアイデンティティと共通の価値観を持っている。

リマ市ヘスス・マリア区にあるペルー日系人協会の中に移住資料館がある。資料館を見学するとパンフレットと共に「価値観」と題した10の言葉が書かれたしおりが配られる。「尊敬、調和、責任、感謝、根気、質素、誠実、信頼、連帯、忠実」である。資料館へ何度も足を運ぶことはないが、似たような言葉を私はよく目にする。「祭り」が行われたAELUには野球場、陸上競技場、サッカー場、体育館、屋内外の水泳プール、テニスコートなどの運動施設が充実している。AELUは元々は日系人が石ころを拾いながら整備してきた運動施設だが、現在は多くの非日系ペルー人にも施設が開放されている。そこで私は時々、週末にテニスをするのであるが、コートへ向かう途中、利用者が行き交うメインの通路に「尊敬、感謝、根気、連帯」と書いた標語が掲げら

れているのだ。日系人が守り育んできた価値観が何気なく日系・非日系ペルー人の目にも留まるようになってきている。日系人社会は長い移住の歴史の中でペルー社会との融合を図ってきた。運動施設だけではなく、日系人協会に隣接する病院も、文化活動も日常的に非日系社会に開放されている。企業家、法曹界、学界など様々な分野で日系人は活躍している。こうした日系人の姿勢と貢献が、ペルー社会における日系人に対する信頼獲得につながっているのであろう。私が以前、駐在していたブラジルでも同様に、ブラジル社会で日系人を評した「ジャポネス・ガランチード（信頼おける日本人）」という言い方を耳にしたことがある。おそらく世界各国、特にラテンアメリカ諸国で共通する日系人に対する評価であろう。

ところで現在、日本にはラテンアメリカから来た多数の日系人が暮らしている。1990年代から急増した日本への出稼ぎを背景に各地に日系人コミュニティーが存在する。日本人一般は、日系人社会が日本国外で守り、育ててきた価値観を知っているだろうか。日系人が先祖の国として抱えている憧れ



AELU「祭り」



アルベルト城間らの演奏

を理解しているだろうか。最近、AELUのテニスで知り合った日系人の友人は、日本へ出稼ぎに行つて10年以上働き、結婚して子供も生まれたが、日本で暮らし続けることが難しいと考え、2年前にペルーへ帰国したそうだ。日本へ定住することを期待しながらも、あきらめて自国へ戻ってくる日系人は少なからずいるのではないかと思う。

日本の未来は、少子高齢化にとともなう経済人口の減少に対してどう労働力を確保してゆくのが焦点の課題となっている。働き方改革で日本の経済人口は十分に確保できるだろうか。多文化共生の試みはまだ始まったばかりである。

100年以上の移住の歴史を持っているラテンアメリカの日系人社会は多文化共生の体現者であり、我々は身近にそうした人々が暮らしていることに気づき、その経験や文化を学ぶために我々からもっと近づくべきではないだろうか。今年開催されたCOPANIのテーマ「未来構築」は、ラテンアメリカ日系人の内輪の呼びかけではなく、日本社会にも向けた発信として受け止めたいと思う。

私はペルーに駐在してからもうすぐ3年になる。1990年代の前半に妻と二人でペルーを旅行したとき、旅の疲れを癒そうと和食を求めてペルー日系人協会に足を踏み入れたことがある。その時は伝統

的な和食に舌鼓を打ち、胃袋を満たただけで会館を後にし、日系人社会の築いた伝統と功績を振り返ることもなかった。それから25年経った今、日々の生活の中で、公私にわたり多くの日系人や日系人社会とお付き合いをさせて頂く中で、はっと背筋が伸びることが時々ある。そのせいだろうか、駐在する前に比べて、自分の身長がちょっと伸びたような気がするのである。

(本稿は、筆者個人の見解である。)

(えぐち まさゆき 国際協力機構 (JICA)
ペルー事務所長)

